

# 華麗島四百日滞在記

文芸学部文学科 教授 井田 太郎

2020年度、中華民国の中央研究院（通称、中研院）で在外研究をしていた。総統府直轄の学術研究機関。Academia Sinicaの名でも通る。20年来の友人梁蕙嫻氏（元智大学）からここの廖肇亨先生を紹介してもらった。私と同僚だった陳捷氏（東京大学）に「今度、中央研究院で一年を過ごす」とメールしたら、「紹介したい友人がいる」と返信があったのだが、なんとその人こそが廖老師であった。奇縁というほかない。

中研院の中国文哲研究所（通称、文哲所）からの招聘状（邀請函）をえたのは、2018年5月のこと。在外研究は専攻同僚の産休やサバティカルと重なり、一年ずれ、コロナの猖獗開始と同時の渡台とあいなった。ままよ、運命である。出国の顛末は、「台南の風神雷神」（『図書』2020年12月号、岩波書店）に少し書いた。上方を出て、帰るまで蜿蜒400日。そのあいだの見聞を記す。

中研院では学術活動中心の裏の宿舎に住んだ。ある晩、中庭に6本ある椰子から椰子へなにかが飛んだ。相撲の鉄砲を幹に数発食らわせると、正体はなんとムササビであった。雨の晩、黄と黒の縞柄の紐が落ちていると思ったら、キイロアマガサヘビ（毒蛇）であった。中研院のある舊莊から車で20分も山に入れば鹿窟、赤狩りで潜伏した作家呂赫若が、ここで毒蛇に斃れたことを思い出し、戦慄した。学術活動中心には大戸屋、一風堂、モスバーガーが店を構え、セブンイレブンではガリガリ君やざるそばも売られていたけれど、元は炭鉱の山も迫り、ここはまことに自然豊かな台北の郊外なのであった。

中研院の歴史語言研究所（通称、史語所）に

は、歴史文物陳列館がある。殷（商）代の馬車が展示されているが、「小学校低学年のころ、学研の図鑑でみたのはこれだったのか」と一驚した。戦前、史語所は大陸で中央博物院籌備処（設置準備委員会）として産声を上げ、かの殷墟の発掘も行ってた。国共内戦で、故宮博物院の文物が国民党とともに台湾へと南遷したのは有名だが、実は、史語所の文物も同様の運命をたどっていたことを知った。

文物という概念があるから、図書館には線装本はもとより、甲骨の実物や拓本、書画までも所蔵される。日本の図書館のように、洋装本以外を嫌うということはない。かような範囲限定は、学術研究を妨げるケチな料簡である。もともと、よく通った院内の傅斯年図書館では、日本語の直近の研究書も「日語図書」として整理され、目をみはる充実ぶりであった。ここの裏には、北京大学教授から中研院院長へと転身した胡適の宿舎が胡適記念館として保存されている。研究院と道路を一本はさんだ小さな丘（胡適公園）には墓もあった。なんとも中台兩岸の戦後を感じさせる空間であった。

私の世代は、侯孝賢の映画〈悲情城市〉（1989）で二二八事件（1947）という台湾の重大事件を知ったのだが、こののちも尾を引いた外省人・本省人の確執は楊徳昌の映画〈牯嶺街少年殺人事件〉（1991）も扱っている。少年による少女刺殺事件をモデルとするが、少年の父は中央研究院の研究者で舊莊、少女は現在の台北101の裏側の眷村に住んでいた。「バスで行けば、30分だな」という土地勘ができて、四時間にわたる映画を中研院の自宅で改めて鑑賞したら、なんととも趣深いことであった。あの映画に描かれた台北の夏の美は、

手の届くすぐ屋外にあった。

輝ける7月の終わり、二二八事件以来の戒厳令を終了(1987)させた巨星が墜ちた。日本語教育世代に育った李登輝である。来日時(2001)、「芭蕉の「おくのほそ道」をたどってみたいなァ」と日本語ですっとほけてみせ、私に戦前のエリートにおける芭蕉観について強い興味を抱かせた。

そういえば、私は日治時代の台湾での俳句、熱帯季題を調べに行ったのである。俳句雑誌という狭い窓からみるよりも、全体的な文化の中で捉えたいと思った。4月ごろ、外国帰りの研究者がコロナに罹患し、院内のジムやプールは全面閉鎖されていたのだが、図書館だけは事前に書目を申請さえしておけば、貸出処理をしてくれる体制を堅持していた。それで下調べを行っていたが、やがて図書館は再開され、人文社会科学聯合図書館に鎮座する『台湾時報』をひたすら通読した。大正八年(1919)から昭和二十年(1945)にかけて刊行されたこの総督府による刊行物は、定点観測地にふさわしい。童謡「ぞうさん」で知られるまどみちお(石田道雄)が本名で発表した戦争賛美の詩や、ゾルゲ事件で有名な尾崎秀実の父、尾崎秀真の論放など、俳句以外にも興味深い個所、必要個所はコピーするという写経のごとき作業に励んだところ、二メートルのコピーの山が書齋に出現、「帰国時、どうしたものか」と悩んでいたなら、畏友藍弘岳氏(史語所)の助け舟でPDFとなった。

ときには、中研院から無料のシャトルバスで台湾大学の図書館(図1)へも赴いた。居



図1 国立台湾大学総図書館 台大総館  
(2020年、筆者撮影)

留査証の個人情報ゲートをゲートで打ち込み、IDを預けさえすれば、簡単に入館できた。この五階にある特蔵室には、民族学・考古学者の国分直一、解剖学・人類学者の金関丈夫といった、日治期の台湾に足跡をのこした学者の旧蔵書が開架でズラリと並び、壮観である。ことに、金関の蔵書は理系の書物というにおよばず、川柳や〈日本絵巻物全集〉までと広汎で、なんだか仲良くなれそうな気がした。戦前刊行物でも複写が製本されたものなどは、据え付けのスキャナーでPDF化(無料)できたことは特筆しておく。つまり、USBさえあればデータにできるわけで、日本も見習ってほしいと思った。

閉架ながら、戦前の台湾資料のほか、ここは和本も豊富である。なにせ、台湾大学の前身は台北帝国大学なのである。『日本書紀』(室町時代写)、国語学者上田萬年の旧蔵書、『歴代宝案』『琉歌大観』を中心とした琉球資料などがある。多くはデジタル化されているが、原本も閲覧できた。中でも、上島鬼貫(伊丹の俳人)の『鬼貫句選』はゆかしかった。箱書は伊藤松宇。旧蔵者は市島春城という二冊本。松宇は「蜀山人手沢本」と墨書したが、上巻見返しに「おにつら句選 全 蜀山人」と大田南畝のくねくねした筆蹟で書き込みがあるばかり。台北帝国大学が購求(1931)、国語国文学研究室に配架されたものなので、ここで教鞭を執った瀧田貞治が集めたのだろうか。

故宮博物院の図書文献館、故宮博物院の展覧会の数々、「不朽的青春」展(北師美術館)、「表現の不自由」展(台北当代美術館)、「經典再現」(国立台湾美術館)など、まだまだ書き残したいことは多い。戦前書籍を扱う古本屋の少なさについても記したいが、はや紙幅は尽きてきた。

さいごに、台湾で知ったことを一つだけ。佐藤春夫が「女誠扇綺譚」「霧社」を生んだ台湾旅行から100年を祝った展覧会、「百年の旅びとー佐藤春夫1920台湾旅行文学展」(国立台湾文学館)を観た。その後、台北101近く

の誠品書店で関連書籍の『文豪曾經來過－佐藤春夫與百年前的臺灣』（衛城出版、2020）をパラパラみていたら、佐藤春夫の生家である病院（和歌山県新宮市）が、近畿大学の短期大学の分校として使用されていた事実を知った（図2）。なんと、日本文学専攻の教員も知らなかったことなので、ここに記しておきたい。



図2 近畿大学絵はがき「短大新宮分校」  
（1957年ごろ、近畿大学蔵）